

のものは少ないが、中期になると蒲鉾型で厚手のものが多くなり断面台形のものもみられる。石斧は前期・中期段階では石器全体の約二割前後を占めるが、鉄斧の普及に伴い後期になると一割以下になる。なお、当地域で使用される太形蛤刃石斧のうち、六割程度が北九州市八幡西区の金剛山麓産のものと考えられ、福岡市今山産のものは五割程度にとどまる。

磨製石鏃は前期中葉には縦長の身部に方柱状の茎を持つものがみられるが、中期では無茎で身部の短い二等辺三角形をなすものが多い。中期後葉以降になると、石剣などとともに武器は鉄器化していくものと考えられ、出土例がごく少なくなる。

#### 第四節 北部九州の弥生時代の遺跡

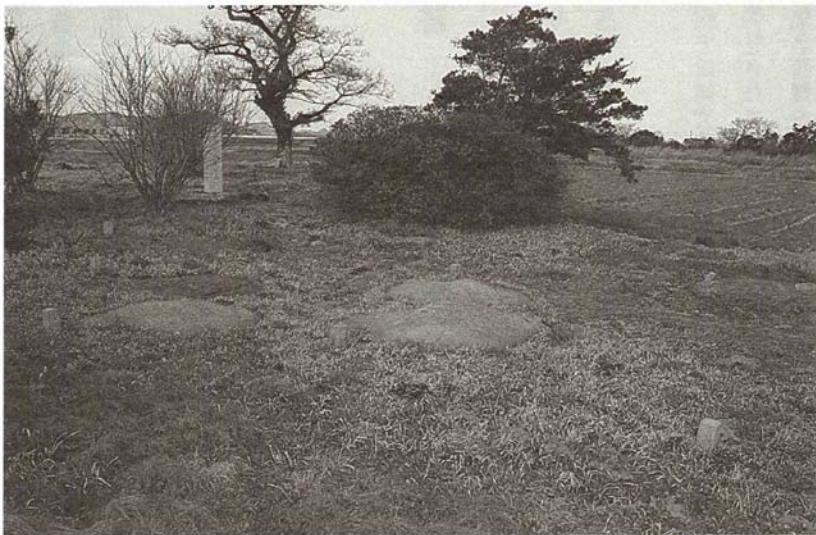
弥生時代における北部九州は、水稲耕作の導入に始まり、銅鏡・銅剣などの青銅器の輸入などを通して、大陸文化を受け入れる窓口となっていた。また、時代を通じて先進地として重要な位置を占めており、古墳時代が始まるまで倭国の中心地の一つとなっていた。

##### 前期

初めて水稲耕作を行った集落は、北部九州では縄文時代晩期末にさかのぼる。福岡市板付遺跡では突帯文土器単純期の水田と集落が発見されている。御笠川の氾濫原に延びる舌状台地上に住居と貯蔵穴からなる集落と墓地が営まれ、水田は集落西側の氾濫原に広がる。弥生時代前期になると、

集落は南北約一〇メートル、東西約八メートルの卵形の環濠に囲まれ、墓地は環濠の外側に営まれるようになる。ほぼ同時期の二丈町曲り田遺跡では水田より三〇メートルほど高い独立丘陵上に、方形竪穴住居跡三〇基と支石墓一基が営まれ、晩期終末の夜臼式より古い曲り田式土器が出土している。遺物では各種大陸系磨製石器と石製・土製の紡錘車のほかに、板状鉄斧が注目される。佐賀県下でも唐津市菜畑遺跡では小さな谷底平野に湿地タイプの水田が開発されている。諸手鋤・えぶりなどの農耕具や弓など、多数の木製品が出土している。また、菜畑遺跡の南東約六キロメートルにある宇木汲田遺跡でも、晩期末の水田跡が発見されている。

縄文時代晩期末から弥生時代前期に、福岡県西部から長崎県の北部沿岸部にみられる特徴的な埋葬施設に支石墓がある。これは土壙墓や甕棺墓の上に支石を置き、その上に大形の板状の上石を載せるものである。曲り田遺跡の支石墓では、楕円形の墓壙に火葬骨が葬



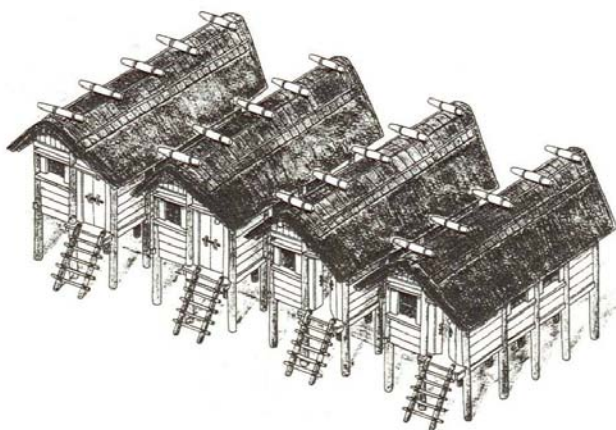
第54図 前原市志登支石墓群

られ、丹塗<sup>ニ</sup>り磨研の小型壺が副葬されていた。前原市志登<sup>シト</sup>支石墓群（第54図）は一〇基の支石墓があり、上石は径二<sup>メートル</sup>程度、厚さ五〇<sup>センチ</sup>を計るものがある。

前期末から中期初頭の時期になると、一般の集団から突出した特定集団の墓地が形成され始める。唐津平野の宇木汲田遺跡では前期末から中期中葉の甕棺墓を中心とした墓地があり、多紐細文鏡・細形銅剣・細形銅矛・細形銅戈など、朝鮮半島からもたらされた青銅器が副葬されていた。福岡平野西部の福岡市吉武遺跡群の高木・大石地区では一〇〇〇基を超す甕棺墓からなる共同墓地が発見され、やや離れた場所に朝鮮製の青銅器を多数副葬する特定集団墓が営まれている。このように、福岡平野から唐津平野にかけての地域では、朝鮮半島との交易を通じて、集団内部での富の集中がいち早く進んだ結果、既に前期末から中期初頭の段階でそれぞれの地域を統括する特定集団が共同体内部から生まれてくる。

### 中 期

前期後半から顕著になってくる拠点集落は中期にかけてしだいに大形化し、環濠を幾重もめぐらすようになる。佐賀県吉野ヶ里遺跡では弥生時代の竪穴住居跡三五〇軒以上・甕棺墓などの埋葬施設二五〇〇基が発見されている。このうち前期中ごろに長径二〇〇<sup>メートル</sup>、面積約四<sup>ヘクタール</sup>の環濠集落が営まれるが、中期後半になると集落を囲む環濠と別に、北側の墳丘墓をも取り巻く南北一<sup>キロメートル</sup>以上に及ぶ大規模な外濠が作られる。更に、後期にはこの外濠の内側に新たに南北一五〇<sup>メートル</sup>・東西七〇<sup>メートル</sup>程度の内濠が掘られる。この時期の集落は面積約二五<sup>ヘクタール</sup>以上で、竪穴住居は一〇〇軒以上にのぼる。また、内濠の張り出し部には物見櫓<sup>ものみやぐら</sup>と考えられる掘立柱建物が建てられ、外濠の外側にも高床倉庫群が建築されていた。甘木市平塚川添遺跡でも中期前半から古墳時代初頭にかけての拠点集落が調査されている。竪穴住居跡二六



第55図 甘木市平塚川添遺跡高床建物復元図

(宮本長二郎氏原図)

○軒・掘立柱建物跡一二一棟などが発掘されたが、竪穴住居跡は中期前半から中ごろのものが八一軒、後期中ごろから古墳時代初頭のものが一四軒となっている。環濠は後期後半から終末に造られ、南北約二二〇メートル・東西約一二〇メートルの内濠に囲まれた約二二ヘクタールの範囲に中心集落があり、その周辺の七つの別区に小集落が形成され、更に外側にも環濠がめぐらされている。内濠の中心部には桁行九・五メートルで、梁間五・七メートルと四・七メートルの大型の掘立柱建物跡が四棟並んで発見された(第55図)。この建物は首長の高殿または集団の倉庫と考えられているが、いずれにしても高床の大型建築物として重要な発見である。

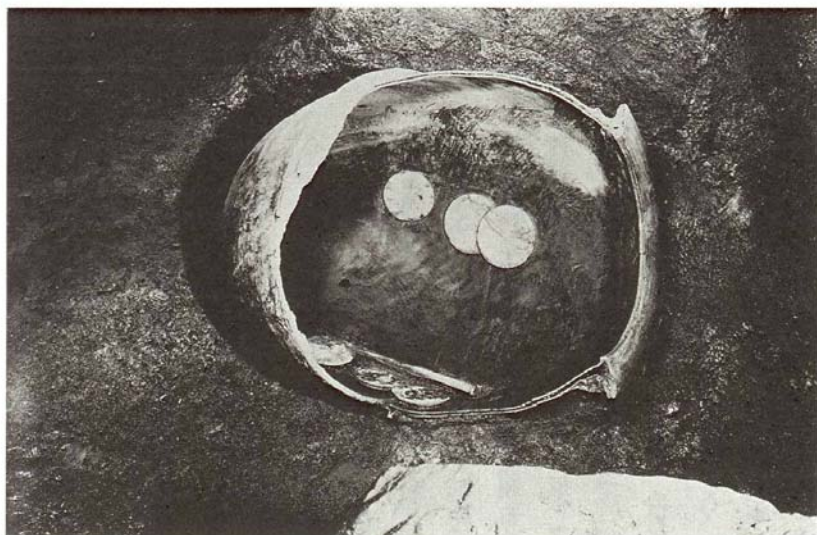
中期には各集落またはクニの内部で勢力を持つ特定集団の墓地が、一般の集団墓地の中に分離して営まれ始める。

このような首長層の墓地としては、次のようなものがある。伊都国の糸島平野では前原市三雲南小路で多数の甕棺墓の中に分離して存在する一号甕棺墓から中国鏡二六面以上・中細形銅剣一本・中細銅矛二本・中細銅戈一本のほかにガラス製の璧・勾玉・管玉などが発見されており、二号甕棺墓からも中国鏡一六面以上とガラス製の玉類が出土している。奴国の春日市須玖岡本一帯は数万基を数える甕棺墓が存在するが、D地点

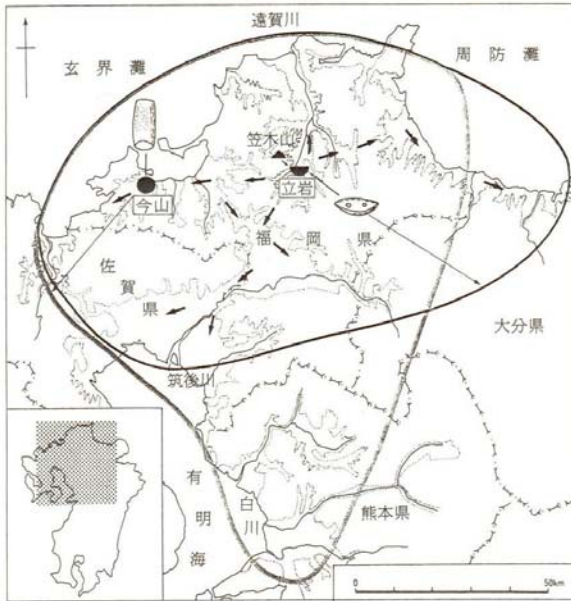
### 第3章 弥生時代

の支石墓下の甕棺から前漢鏡三〇面・銅劍四本・銅矛五本・銅戈一本・ガラス璧一点が発見されている。更に、南東約一〇メートルの夜須町東小田峰遺跡でも甕棺墓が四二〇基以上発見され、このうち10号甕棺墓からは前漢鏡二面・鉄劍一本とガラス製璧を転用した円板状装身具一点などが出土している。一方、不弥国に比定されている飯塚市では立岩堀田遺跡でも三次にわたる調査で、特定集団の墓地から四三基の甕棺墓が発掘され、10号甕棺から前漢鏡六面・銅矛一本・鉄劍一本が出土している(第56図)。吉野ヶ里遺跡では中期前半から中ごろの時期の南北四〇メートル、東西二六メートル、高さ二・五メートルの墳丘墓が営まれ、内部の甕棺墓からは有柄銅劍一本・細形銅劍三本やガラス製の管玉などが出土している。

中期には集団間でしばしば戦闘が行われており、福岡県穂波町スタレ遺跡では甕棺墓内から脊椎に磨製石劍が刺さった成人人骨が発見されており、筑紫野市



第56図 飯塚市立岩堀田遺跡10号甕棺墓 (飯塚市教育委員会提供)



第57図 今山石斧と立岩石庖丁の分布範囲

(下篠信行「村と工房」『古代史復元4』より)

隈・西小田遺跡群でも頭骨のない人骨が甕棺墓に埋葬されていた。ほかの遺跡でも石鏃や石剣の先端部だけが棺内から出土する例は数多い。これらの例は、『魏志倭人伝』の内にみる百余国から三十余国への過程を示している。

中期には日常生活に使用される道具の生産の在り方も変化し、石器では専門的な製作集団が現れる。飯塚市立岩周辺の堀田・焼ノ正・下ノ方などの遺跡では、西方にそびえる笠置(木)山などで産出する赤紫色の輝緑凝灰岩や頁岩を素材に、石庖丁を中心に石鏃・石剣などを製作している。また、福岡市西区今山遺跡では黒色の玄武岩を素材とし、長さ二〇センチメートル・幅八センチメートル・厚さ六センチメートル前後の大型の太形蛤刃石斧を製作している。更に、北九州市八幡西区の金剛山西麓に所在する原・馬場山・辻田西・門田などの諸遺跡では、灰色の硬質砂岩・粘板岩で石庖丁・扁平片刃石斧・石鏃・石戈などを製作している。これらの石器の一部は、福岡県内を中心に佐賀県東部や熊本県北部の地域でも使

第3章 弥生時代

用されている(第57図参照)。また、福岡県春日市周辺で鋳型が集中的に発見され、この時期には青銅器の生産も盛んになってきたことが分かる。岡本町四丁目遺跡や大南遺跡では小銅鐸の鋳型が、大谷遺跡では銅鐸・銅矛・銅劍・銅戈の鋳型八点が発見されている。須玖永田遺跡では、小型仿製鏡、赤井手遺跡では銅矛・銅戈などの鋳型九点とともにガラス勾玉の鋳型が出土している。このほか、春日市の北側に接する福岡市赤穂ノ浦遺跡では外縁付き紐式銅鐸の鋳型が発見されているが、同様のものは佐賀県鳥栖市安永田遺跡でも見つかった。

後 期

後期になると防御施設としての環濠が多くなり、拠点集落だけでなく中・小規模な集落でも環濠を持つものが現れる。福岡市野方中原遺跡では後期後半の環濠が二か所あり、長径約一二〇メートルの楕円形環濠(A溝)は堅穴住居跡からなる居住区を囲み、B溝は二五×三五メートルの規模で高床倉庫群の周りに方形にめぐらされている。佐賀県千塔山遺跡では丘陵頂上部の平坦面を囲む一辺が七〇メートル前後の方形の環濠が確認されており、その内側には堅穴住居跡七〜八軒と七棟の高床倉庫が、外側でも三か所



第58図 佐賀県千塔山遺跡弥生時代後期集落配置図

(下篠信行氏原図)

に竪穴住居跡群が見つかっている（第58図参照）。この例は一つの集団内でも環濠の内側に住居を営むことができる人々と、そうでない人々とが存在したことを示している。

中期以後顕著になる特定集団の墓地は、後期初頭には王墓と考えられる特定個人墓へと変化し、福岡県西部から佐賀県北部で発見されている。末羅国の佐賀県唐津市桜馬場遺跡には後漢の方格規矩鏡二面・巴形銅器三点・銅釧二二六点を副葬する甕棺墓がある。伊都国では前原市井原鍵溝遺跡の甕棺墓から方格規矩鏡二面以上・巴形銅器三点などが発見され、平原遺跡の方形周溝墓からも方格規矩鏡などの中国鏡三七面と日本最大の仿製内行花文鏡五面などが出土している。このように、後期に営まれる首長層ら特定個人のための墳墓が、次の時代では前方後円墳を典型とする古墳の築造へと移行していく。